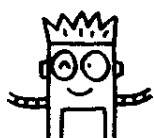


ふじわらのみちなが

藤原道長は、どんな人だったの



3代の天皇の外祖父として権力をふるい、「この世はわが世」とほこった貴族だよ。

藤原道長は966年に、藤原氏の北家の系統の藤原兼家の子として生まれました。995年の感染症の流行で、貴族が8人も亡くなるなどの運の良さもあって、急速に昇進し、996年に左大臣に任命されて、「道長の時代」が始まりました。一時は、摂政・太政大臣にもなりました。関白にはならなかったのですが、道長の地位は関白と同じようなものであるとして、「御堂関白」とよばれました。

3代の天皇の外祖父になった

当事、朝廷で権力をにぎるには、娘を皇族のきさきに送りこみ、生まれた皇子が天皇になると、その外祖父(母方の祖父)になる、というのが、かかせない手段でした。道長も、娘を次々に、皇族のきさきに送りこみました。それによって道長は、68代後一条・69代後朱雀・70代後冷泉の3代の天皇の外祖父として、権力をふるいました。息子たちも昇進して、道長の勢力を支えました。

「この世はわが世」とほこった

1018年10月、三女の威子を後一条天皇の中宮にするなどの儀式があり、その後、道長の土御門邸で、祝宴が開かれました。道長が「此世をば我が世とぞ思ふ望月のかけたることも無しと思へば」の歌をよんだのは、このときです。

建築好きだったが、病気で苦しんだ

道長は建築好きで、いくつもの寺院や邸宅の新築・改築を行いました。一方では、胸や目の病気で苦しみ、1019年に出家しました。そして、僧としての住まいとして、無量寿院という阿弥陀堂を建て、その後も金堂などを建て増して、法成寺という、極楽浄土を目で見るような、華やかなお寺をつくりました。